

## 大正期における海軍工廠設備投資～予算構成と需要変化を中心に～

### (要旨)

第一次世界大戦後の日本機械工業の発展において、軍工廠はその原動力として旺盛な機械需要を有していた。この原動力とは、具体的にどのようなものであったのだろうか。本稿はこの問題への第一次接近のために、横須賀海軍工廠を具体例として、海軍の機械購入、すなわち設備投資を検証したものである。ここで明らかにされたのは、同工廠の最適化行動や需要と供給の一致という、極めて経済学的な現象である。日露戦後経営下の正貨流出危機や第一次世界大戦による輸入機械途絶により、海軍の設備投資は当初低調であった。しかし生産の現場であった海軍工廠は、機械の老朽化や旧式化から新規更新を望んだ。この矛盾の解決策として横須賀海軍工廠は、国産機の大量導入を図った。軍拡期は設備投資が盛んになり、同時に国産機が横須賀海軍工廠に急速に普及した。例えば旋盤では、横須賀海軍工廠の需要の中心である小型旋盤を生産する国内企業は、利用に差支えない水準で、海外企業より安価な旋盤の供給をしていた。ここに見られる需要と供給の一致により、軍工廠は輸入代替化の原動力としての役割を果たした。